

●まず『古典文法100』【81】で、

解法を確認してみる。(下を参照)

- 1 おのが身はこの国の人にしもあらず。
- 2 会はでやみにし憂さを思ふ。
- 3 琴の音のほのかに聞こゆる。
- 4 丹波に出雲といふ所あり。
- 5 抜かんとするに、おほかた抜かれず。

(識別のポイント)

1 「に」の下に「あり」があれば、「に」は**断定**の助動詞「なり」の連用形。

※1に関して、難易度の高い例文にする方法が二つある。一つは、「あり」が敬語化している文。

例えば、「あり」の尊敬語に「おはす」「おはします」がある。また、「あり」の丁寧語に「侍り」「候ふ」がある。いずれの敬語も元が「あり」なので「にくおはす」「にくおはします」「にく侍り」「にく候ふ」の「に」も断定。

※難易度の高い例文としてもう一つ。文が「にや。」という風に、「に十係助詞。」で終わることがある。

この時、下に「あらむ。」が省略されている。つまり「あり」があるので、「に」は断定となる。

2 「に」の下に「き」「けり」「たり」があれば、「に」は**完了**の助動詞「ぬ」の連用形。

※例えば、「にき」「にけり」の「き」は過去の助動詞だが、活用して「せ・〇・き・し・しか・〇」と変化する。

従って、「にし」「にしか」という文字列で現れることがあるが、この場合の「に」も完了。

3 直前に「とても」を挿入して文の意味が通るなら**形容動詞**。

右の「に」を正確に説明すると、ナリ活用形容動詞「ほのかなり」の連用形活用語尾

※「静かに」のように現代でも使う形容動詞なら判別しやすいが、例えば「あてに」のように古語特有の形容詞になると難易度は上がる。古文単語を覚えておくことが、識別問題を解く際にも有利に働く、ということだ。

4 **格助詞**の「に」の訳は「〜に」。

5 **接続助詞**の「に」の訳は「〜ので」「〜が」「〜と」のいずれか。

●では、実戦。各例文の枠込みのにはそれぞれa〜eのどれか。a〜eの記号で答えよ。

- (e) ① 松の緑こまやかにに、枝葉汐風吹きたわめて、
- (b) ② かつ破り捨つべきものなれば、人の見るべきにあらず。
- (a) ③ 陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れ初めにし我ならなくに
- (c) ④ 京にはあらず、東の方に住むべき国求めにとて行きけり。
- (d) ⑤ 十月つごもりなるに、紅葉散らで盛りなり。
- (a) ⑥ 年の内に春は来にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ
- (d) ⑦ 門に入るに、月明かければ、
- (e) ⑧ 心もとなげに起き伏す。
- (e) ⑨ うらうらと春なりければ、海いとのだやかにになりて、
- (a) ⑩ 我が待たぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず
- (e) ⑪ 女房なども何か口たたきつつ、心そらにありくもあり。
- (b) ⑫ やんごとなき人にや、
- (a) ⑬ おとなになりにければ、男も女も恥ぢかはして、
- (b) ⑭ 中に十ばかりにやあらむと見えて、
- (e) ⑮ 二十二日、和泉の国までと平らかにに願立つ。
- (d) ⑯ 命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。
- (c) ⑰ 尾花沢に清風といふ者を尋ぬ。
- (b) ⑱ 隠し奉るべきことに待らず。
- (a) ⑲ この頃、物怪に困じにけるにや。
- (b) ⑳ この頃、物怪に困じにけるにや。

a	完了の助動詞	b	断定の助動詞
c	格助詞	d	接続助詞
e	形容動詞の活用語尾		